

高橋誠一郎著『司馬遼太郎の平和観
—「坂の上の雲」を読み直す—』

(東海大学出版会)

杉山 文彦

本書の著者、高橋誠一郎氏はロシア文学の研究者であるが、最近はむしろ司馬遼太郎の文学を語ることで一般には知られている。ロシア文学者である高橋氏が何故にかくも司馬文学にこだわるのかは、本書を読めば自ずと明らかになるが、それは共に西欧近代の帝国主義の圧力のもとに近代化を迫られながら、それに一定の成功を収めると直ちに周辺を圧迫する帝国主義へと変質していった日本とロシアの近代に大きな共通点を見出し、両国の近代を比較検討することを通して近代の本質に迫り、それを乗り越える道を模索する高橋氏の問題意識が、そのテーマを展開するのに格好の素材として司馬文学を見出したことによる。しかし、その高橋氏から見れば、国民的作家として広い読者を持つ司馬遼太郎の作品は、必ずしも司馬遼太郎の意図した通りには読まれていない。なかんずく、『坂の上の雲』の読まれ方は問題がある。これが恐らく、B6版239ページと必ずしも大部とはいえぬ中に多くの要素が詰め込まれた本書が書かれた動機のひとつであろう。

本書の内容について評する前に、司馬文学の人気の社会的背景について一応考えておいたほうが良からう。夥しい司馬遼太郎の作品は、初期の伝奇ロマンから歴史ヒーロー小説、歴史小説、そして後期の文明批評へと展開するといわれる。その中で歴史小説作家としての司馬遼太郎の評価を決定的なものとしたのがこの『坂の上の雲』であった。『坂の上の雲』の新聞連載が始まったのが1968年4月、完結したのが1972年8月、この年代は重要である。1960年代の経済高度成長の結果、日本が名実共に大国と認められるようになるのが1970年代、しかしそれは必ずしも人々の心を満たすものではなかった。物質的豊かさとの引き換えにやってきた齟齬とした毎日、環境破壊、希薄となった人間関係、国外からは「エコノミックアニマル」なる異名まで頂戴する始末で、とても経済大国日本を誇りに思える状況にはなかった。『坂の上の雲』はこのような時に発表されたのである。

戦後日本の社会思潮は、当然のこととして、第二次世界大戦への反省から始まった。アジアの近隣諸国を侵略したあげく第二次世界大戦へと突き進んで崩壊した日本軍国主義の形成過程を、日本近代史の中から解き明かしてゆく作業が、きびしい近代日本批判を伴ったのは極めて当然のことであった。政治学者丸山真男、歴史家大塚久雄たちによって明治以後の近代日本に残存する封建遺制、封建的家族制度、権威主義的組織原理等々が軍国主義ファシズムを生み出し支えた元凶として次々と批判の俎上にのせられた。「義理人情」に流され、家族的「なれあい」によって物事を決めるのが「日本人の悪い癖だ」と、言うような議論が新聞や雑誌によく載った。自我の確立と市民社会の成熟が日本人と日本社会の目指すべき道と

された。また、社会主義もまだ未来のユートピアとしての輝きを失っておらず、マルクス主義の思潮も市民社会論と複雑に交叉しながら展開していた。これが戦後日本の社会思潮の主流であった。

しかし、1960年代から本格化した日本の経済高度成長は市民社会論とはあまり関係のないところで進展していた。当時の日本の庶民にとっての焦眉の急は貧しさからの脱出であり、日本の国民的課題は物質的に豊かな先進国に「追いつけ追い越せ」であった。「追いつけ追い越せ」においては、個人の創造性よりも集団の協調性であり、「何をするか」の議論より「如何にやるか」の調整であったのであり、自我の確立と市民社会の成熟は、高度成長期日本の経済・社会にとって当面さほど重要ではなかった。人々は集団への恭順と仲間内での協調の中に自我を埋没させて、企業戦士として日々企業の発展のために献身し、その延長線上にマイホームの夢を見ていればよかった。ただその企業戦士たちからすれば、社会思潮の主流である市民社会論が自分達の献身や献身の対象である集団をいっこうに顕彰してくれぬことについては、声には出さぬが心中大いに不満ではあった。このような中に、貧乏士族出身の秋山兄弟という必ずしも史上有名ではない軍人を主人公とする『坂の上の雲』が登場する。この小説は最終的には、国家論さらには文明論までを射程に入れた壮大なものとなっており、その連載の初期にあつては国民国家明治日本の成功物語という一側面を強く持っていた。これによって企業戦士たちは、自分達の思いを代弁してくれる存在を得たと思った。これが司馬遼太郎の人気の背景であろう。その後になると、集団への恭順と献身、希薄な自我と協調性の強調など、それまで市民社会論によって批判的に取り上げられてきたものが、終身雇用・年功序列の日本的経営の背景をなす日本人間関係として高く評価される一時期を迎えることとなる。『坂の上の雲』はそのような時代の幕開けに位置したのである。国民国家史観に立つ藤岡信勝氏ら「新しい歴史教科書を作る会」のメンバーが「健康なナショナリズム」として『坂の上の雲』を好んでとりあげたのも、このような背景を考えれば当然であったといえよう。

このような司馬文学の読まれ方は、高橋氏より見れば明らかに司馬遼太郎の一面、それも比較的小さな一面しか見ていないことから来る誤読である。高橋氏によれば『坂の上の雲』が、国民国家史観に通じるような一側面を持っているのは確かであるが、司馬遼太郎はこの作品を書き進めてゆく中で狭い国民国家の視野から抜け出し、偏狭なナショナリズムを批判する視座を獲得し、文明批評を展開する歴史観を形成して行ったのである。このとかく誤読されがちな『坂の上の雲』を読み直すことを通して、晩年には近代文明を批判的に相対化するに到った司馬遼太郎の歴史観・平和観を浮き彫りにすることが本書の目的であろう。

この目的の為に、高橋氏は本書の中で多くの作業を行っている。本書は、序章、『坂の上の雲』と「司馬史観」の深化、第一章「国民国家」の成立、(自由民権運動と明治憲法の成立)、第二章、日清戦争と米西戦争、(「国民国家」から「帝国」へ)、第三章、三国干渉から旅順攻撃へ、(「国民軍」から「皇軍」への変貌)、第四章、旅順艦隊の敗北から奉天会戦へ、(ロシア帝国の危機と日本の神国化)、第五章、勝利の悲哀、(「明治国家」の終焉と「帝国」としての「皇国」)、終章、「愛国心」教育の批判、(新しい「公」の理念)、という構成とな

っており、一応『坂の上の雲』の内容を追いつながら論を進める形となっている。しかし、各章ごとに付いている副題からも判るように、それと並行して多くのことが語られている。作品内容を分析し文体・表現の変化から司馬遼太郎の歴史観の変化を読み取ることは勿論のこと、司馬の他の作品との比較、とくに『坂の上の雲』より後の作品との比較を通して司馬史観の展開を明らかにすること、さらには作品の舞台である明治期の社会思潮を司馬がどう見ていたかを探るための明治期の文学・思想の研究、例えば徳富蘇峰・蘆花兄弟への比較検討、福沢諭吉への批判的検討等々、軍事、外交、社会、文化、国際関係、文明論などの各方面にわたった考察が散りばめられている。本書をうまく読めば、近代日本及び日本を巡る国際関係を文明論的に概観することができるであろう。

唯、一つここで苦言を呈すれば、本書は読者にうまく読むことを要求している。読者に対してあまり親切にはできていない。これは本書が、高橋氏が市民講座等で行った講演の記録をもとにしているらしいことと関係するのかも知れぬが、多くのことが並行して語られていて、その相互の関係が判然としないところがある。司馬遼太郎の見方を高橋氏が紹介しているのか、高橋氏自身の見解なのか、あるいは明治日本の状況を説明しているのか、そこのあたりが、日本近代史や司馬遼太郎の文学に詳しくないものには、相当に判りにくい。しかしまあ、このさまざまなものが詰め込まれた本を、自分なりに整理しながら読むことも、また一つの面白さとも言えるのではあるが。